

# 方方の「家」

## ——「出門尋死」に見る家族と武漢——

瀬 邊 啓 子

### 〔抄 録〕

2004年、武漢の作家である方方が全編に互って武漢弁を用いた「出門尋死」を発表した。全編に互る武漢弁使用は、「落日」（1990）以来であり、方方作品において「出門尋死」がどのような意味と役割を果たしているのか研究・分析を行った。

そこで「家」をキーワードに、一つは故郷武漢及びその方言描写から、もう一つは「家族像」に対してという二つの側面からの分析を行った。前者からは武漢弁であるということへの強調が行われていることと、武漢に対しての描写が従来と異なっていることが分かった。後者からは「出門尋死」のなかの家族において、特に女性の運命がこれまでの過酷な描写から解き放たれていることと、その家族像が方方の両親の姿に重なることが分かった。それにより「出門尋死」の特異性が明確になり、方方作品においての一つの転換点となる作品であることが明らかになった。

キーワード 方方、家、武漢弁、死、女性の運命

### 1. はじめに

作家方方（1955. 5～）は“新写实小説”の旗手の一人として知られているが、一方では武漢を描く作家の一人として知られている。

“漢味小説”とも呼称される武漢を舞台にした作品群のなかで、武漢方言を使用しているものはそれほど多くはない。方方は「落日」（『鍾山』1990年第6期）で全編に互る武漢弁（武漢話）の使用を行っているが、その後は方言使用をしていなかった。

しかし2001年に発表された「奔跑的火光」（『收穫』2001年第5期）で武漢弁が一部使用され、「出門尋死」（『人民文学』2004年第12期）にいたって再び全編に互る使用がなされている。さらに「出門尋死」以降の作品ではしばしば武漢への描写と武漢弁の全編に互る使用がされており、この2004年前後において方方の武漢ないし武漢弁に対する創作の姿勢が変わったと見るこ

とができる。

ここでは「出門尋死」を中心として、その武漢弁使用と武漢への描写がどのようになされ、作中において「家族」がどのように描かれているかを見てゆくことで、方方のアイデンティティの帰属先である、大きな枠組みとしての「家」——故郷とも言える武漢と「家」そのものである家族という観点から分析を加えてゆく。その過程で、方方の作品群において「出門尋死」がどのような意味を持ち、どのような役割を果たしているのかを考察してゆく。

## 2. 方方の「武漢」

### 2.1 方方と武漢弁

方方にとって、武漢弁は純粋な武漢人ではないというコンプレックスの象徴的な存在であることは、すでに拙論「方方『武漢人』に見る武漢人」(『大阪大学言語文化学』vol.8、1999)で述べているので、ここでは詳述はしない。

まず方方の両親の言語環境について見ておくと、両親はともに江西省彭澤県の人である。江西省は贛方言と呼ばれる方言を用いる地域であり、彭澤県は贛方言のなかでも「余干片」に属し、景德鎮などの方言と同じ仲間になる。彭澤県の方言は入声がなく5つの声調となるが、景德鎮とは異なり、江淮方言と贛方言の緩衝地区に位置し、双方の方言特徴を持っているため、余干片と少し違いがあると『贛方言概要』(p.32)では指摘がなされている。余談ではあるが、方方の母方の祖父の出身地である湖口は「南昌片」に属し、こちらも入声がない6つの声調だが、彭澤県とはまた異なった特徴を有す贛方言となる。

方方が2歳まで住んでいた南京の方言は江淮方言(江淮官話)と特徴を同じくする部分を持つ方言でもあり、彭澤県出身の方方の親類縁者たちにとっては、比較的なじみのある方言と言える。つまり方方の親戚の多くは贛方言と江淮方言のどちらか、あるいは双方の特色を持つ方言を使っていたということになる。

方方は外では武漢の方言を耳にし、家では両親の故郷の言葉などの武漢弁以外の言葉を耳にしていた。方方の言語環境は、両親の出身地である彭澤県の江西方言(贛方言)の影響を免れなかったことは間違いなく、このことは方方自身も『閉上眼睛就是天黑』の「後記」で「異郷に住むというあの感覚、周辺の人の生活と同じではないというあの感覚、言語表現上のあの差異は、永遠に存在している」<sup>(1)</sup>と述べているように、やはり言葉の表現上の差というものを感じていた。つまり、たとえ方方が武漢弁に習熟していたとしても、家庭内の言語環境の影響は免れず、語彙レベルであったとしても生粋の武漢弁とのずれがあるのである。

武漢人は相手が武漢人ではないと見ると武漢弁を使わないということは、方方自身が『武漢人』(浙江人民出版社、1997)のなかで語っている。その上で、「生粋」の武漢人が方方に対して、武漢弁を使ってくれないことも語っており、方方も「我々武漢弁を話すのがあまりうまい

とは見なされない人」<sup>(2)</sup>の例にもれなかったことが分かる。このため方方にとって自分が「武漢人」であることを主張するとき、武漢弁が少なからず障害になったことは疑いがない。

ただし方方は2歳には武漢に移り住み、「余所者から土地の者になった」<sup>(3)</sup>と「住む」ことによって武漢人になったことを主張している。しかし「小さいころから余所から来た人がメインの宿舍エリアで生活していたため、今日までずっと、わたしの武漢弁は依然として十分標準とは言えない」<sup>(4)</sup>とも語っている。このように方方は武漢人であることを主張しつつも、武漢弁には十分な自信を持てなかったのである。

ここで「落日」における、方方の武漢弁の使用を見てみると、

丁如虎説：“麼吵？麼吵？”

成成又復述了一遍：“太，喝了‘敵敵畏’。”

(「落日」「一唱三嘆」陝西人民出版社、1992、p.150)

成成説：“我媽早死了，沒得屁可放得。”

漢琴説：“沒得良心的東西，我媽這麼喜歡你，你還想她早死。”

成成説：“彼此彼此。沒我太，你還不是被嬌嬌捆得一動都不能動？”

(「落日」「一唱三嘆」 pp.179,180)

上記のように会話文を中心に用いられている。そして“麼”には“漢口方言—怎麼，什麼意思”、“太”には“漢口方言—奶奶”（ともにp.146）という注が付されている。“吵”にはとりたてて注はないが、これは武漢弁特有の語気助詞となる。このように“麼”，“沒得”など武漢弁の特徴ある言葉を繰り返し、またこれらの特徴的な言葉に対しても繰り返し注釈をふることで、これらの文章が「武漢弁」であることを「強調」していることに気づく。

一方、池莉は「冷也好熱也好活着就好」(『小説林』1991年第1,2期合刊、以下「冷也好」と表記)で会話文を全て武漢弁で表記しているが、こちらは方方とは対照的に一切の注釈をつけずに、読者に理解しにくい武漢弁は極力避けるという方針を採っている。池莉は「冷也好」を除いて全編に互る武漢弁使用は行っていないが、実は作中に武漢弁をうまく取り入れ、注釈をつけずに「武漢弁ではこのように言う」という説明をつけることで、読者に武漢弁を「教える」と同時に武漢弁の持つイメージをうまく利用している。

この方方の「武漢弁であることの強調」は、「出門尋死」における書き換えから、より顕著に窺うことができる。「出門尋死」の発表時には、すでに読者には知られているであろう“麼事”などの典型的な用語には注釈がつけられていない。もちろん注釈はつけられているのだが、“皮絆：武漢方言，第三者”(『人民文学』2004年第12期、p.2)というように、比較的知られていない単語に注釈を付している。

しかし『方方作品精選』(長江文藝出版社、2005、以下『精選』と表記)などに所収された

「出門尋死」では“皮絆”には注釈がつけられず、“麼事”、“麼様”に注釈がつけられているのだ。さらには「出門尋死」以降の武漢弁を用いた作品ないし武漢のことを描いた作品を集めた『春天来到曇華林』(作家出版社、2007、以下『春天』と表記)でも同様に注釈の異動があり、多くの作品に“麼事”や“麼様”に対して注を付している。

「出門尋死」の書き換えは、この注釈部分にとどまらない。

例えば、冒頭部には“突然就有了大便的感覚。何漢晴激愣了一下, [突然大便の感覚が生じた。何漢晴はぶるっと震え]”(『人民文学』p.2、下線は引用者)という文章がある。この部分は『精選』では、“突然就有了解大手的感覚。何漢晴激愣了一下,”(p.267)となり、『春天』では“突然就有了解大洩的感覚。何漢晴激靈了一下,”(p.52)となる。前者は明らかに武漢弁への書き換えで、『武漢方言研究』においても、“解大手 [kai<sup>42</sup>ta<sup>35</sup>sou・]”(p.149)を大便の武漢方言として紹介している。つまり『精選』のほうはその表記のままをとり、『春天』では意味の分かる“洩[糞便を排泄する]”という文字を用いながら、より方言の音に近いものを選んだのではないと思われる。後者については方言辞書に同種の表現が見あたらないので、まだ考察の必要がある。

この書き換えは、作品を発表したあとに方方自身が気付いたものか、あるいは周囲の武漢人に促されてかは分からないが、「出門尋死」の表現をより濃厚な“漢味”へと導いている。しかしこういった部分には注記は付けられず、かえっておそらく知られていると思しき“麼事”に注を付けているのは、やはり「武漢弁を使用している」ことに対する強調と考えることができる。

## 2.2 方方の武漢

方方の小説作品を見ると、池莉に比べると武漢への言及は少ない。代表作とも言うべき「風景」(『当代作家』1987年第5期)では河南棚子を舞台に、漢口駅の移転をうまく利用した作品作りをしているが、晴川飯店や漢正街への言及はあるものの武漢そのものへの言及はされず、水果湖や航空路などの地名が示されるにとどまっている。

このことはやはり「原因は1つにはわたしがここで生まれ育ったわけではなく、両親がここに引っ越して来たときに、よるべがなかったことだ。2つ目にはわたしが本当の武漢の市井のなかで暮らしたことがないからだ。わたしの武漢弁はあまり生粋のものではなく、武漢の道にもあまり詳しくもなく、武漢の風俗にもあまり慣れておらず、武漢の飲食にも生半可な知識しかない」<sup>(5)</sup> ことに由来する。しかし方方は「それでもそれ(武漢)を書きたい」<sup>(6)</sup> のである。

そこで方方は「風景」で河南棚子という河南からの移民が住む通りを描き、主人公の一家もまた祖父が武漢に逃げてきた「移民」の一人であったことに触れることで、本場の武漢の習俗や食生活に言及することを避けた。「風景」は方方にとって武漢を描き始めた初期の作品と見なすことができ、どこかまだ武漢を語るには自信のなさとも言える「遠慮」があったと思われる。



る。また「風景」の一家のように、武漢の居住者でありながら河南棚子出身と分かる生粋の武漢人と見なされない人々は、まさに方方その人自身でもあったのだ。

方方は“漢味小説”としても知られる作家ではあるが、「出門尋死」以前の作品においては武漢そのものへの言及はそれほど多くはなく、武漢特有の文化には言及をして来なかった。このことは方方自身も『武漢人』(1997)を書くことで、武漢のことを熟知したことを述べている<sup>(7)</sup>ように、『武漢人』以降に武漢を描くことに自信をつけたと言える。さらに2003年の「落日」のテレビドラマ化<sup>(8)</sup>にともない「落日」が再び注目を集めたこと<sup>(9)</sup>、CCTVのドキュメンタリー「一個人和一座城市」(2003)で武漢のことを語ったこと、加えて『漢口の滄桑往事』(湖北人民出版社、2004)と『漢口租界』(湖北美術出版社、2006)と相次いで漢口の歴史について書いたものを出版したことで、方方はより武漢への叙述を増やすことになったのではないだろうか。

事実、方方自身も『春天』のなかで、『漢口の滄桑往事』で武漢の古い建築物を調べたことが「春天来到曇華林」(『小説月報 原創版』2006年第2期)の創作につながったことを述べており<sup>(10)</sup>、武漢のことを調べることが武漢を描写することに直結して行ったのだ。

ところで武漢弁使用を再開した「奔跑の火光」(2001)は武漢を舞台にした作品ではなく、湖北の鳳凰垸という村を舞台に描かれている。この作品では、漢口が別天地を象徴する南方へ移動するための「窓口」としてシンボリックに描かれるのみで、方言は使用しているものの武漢及びその文化への描写はされていない。

池莉は「冷也好」で武漢の食文化とそのエピソードを取り上げるなど、武漢の風景だけではなく食文化や習慣を作品に多く取り上げて来ている。方方の「落日」では“熱乾麵”や“麵窩”といった武漢を代表する食べ物を買うという場面が出てくるが、呂運斌の漢正街風情録<sup>(11)</sup>のように文化的な背景を説明することはしていない。

「出門尋死」でも武漢特有の食事の風景を取り込んでいるのだが、注目すべきは主人公何漢晴が死を決意していたときに熱乾麵を食べ、その軽食屋の女主人が涙をこぼす何漢晴に自らの人生観を披露する場面である。そして彼女の言葉は何漢晴のなかに残り、ラストシーンで反駁される。女主人は「人間が生きてゆくというのは、その苦勞をするため」だというのが、何漢晴は「その人の一生ですべき苦勞が終われば、やっと死ぬのだろう」<sup>(12)</sup>という結論にいたる。そして何漢晴は「人生なんてこんなものだ」<sup>(13)</sup>と開き直るのだ。その場面に繋がる重要な役割を果たしているのが、熱乾麵を売る女主人なのだ。

さらに面白いのは、客を呼び込むために、熱乾麵は日々を味わいのあるものにするもの<sup>(14)</sup>という宣伝文句を叫ぶことだ。方方は熱乾麵の歴史的な背景に言及しているわけではないが、武漢における熱乾麵と人々の距離感というものをこのように見事に表現しているのである。

武漢三鎮は漢口は商業区、武昌は文化区、漢陽は工業区として知られている。そのため武漢を舞台にした作品の多くが漢口か武昌を舞台とし、漢陽への言及は決して多くない。しかし方

方は「風景」で漢陽にある晴川飯店を取り上げたように、「出門尋死」でもあえて漢陽にスポットをあてている。何漢晴の実家がある南岸嘴や夫とのデートの思い出の地はいずれも漢口を望む位置ではあるが、漢陽にある。そして自殺場所に選んだのも、漢口と漢陽を分ける漢水にかかる橋——漢水橋である。特に南岸嘴は晴川橋を渡れば漢正街という位置取りであること（『人民文学』p.35）が言及されている。このように「漢口を望む」という距離感が方方と武漢の距離感を表しているように思えてならない。“漢味小説”の多くにはこの漢正街周辺の漢口から長江下流域側方面が描かれているのに対して、方方は漢水をはさんだ対岸に拘る。

しかしそれは『武漢人』のなかで自身が武漢人であることを主張することにためらいを多く見せていた方方が、後になって友人からも「あなたが本物の武漢人ではないと言ったとしても、武漢は認めないわよ」<sup>(15)</sup>と反論してもらいたいという気持ちを持っていることを吐露しているように、これは方方の一種の謙遜である。そして武漢への言及を漢陽から始めているのもこの微妙な心理が働いているのではないだろうか。つまり他の作家と視点をずらしてあえて漢口を描かないのは、生粋の武漢人との真っ向勝負を避けているとも言えるが、誰も言及しない漢陽を方方は描くことができるという主張でもあるのだ。これを踏まえて見てみると、「風景」ではまさに冒頭で漢陽にある晴川飯店の言及をすることから始めているのである。

「出門尋死」では頭から漢陽を描写しているわけではないが、「出門尋死」以降武漢弁の全編使用及び武漢の町並みの描写をしていることを考えると、「漢陽から始めた」という位置づけに見える。「出門尋死」のあとに発表された「中北路空無一人」（『上海文学』2005年第5期）ではタイトルにもある武昌の中北路を描き、「春天来到曇華林」も武昌の歴史ある町並みを残す曇華林を取り上げるなど、作品舞台は武昌へと移ってゆく。特に「春天来到曇華林」は同性愛をテーマに土家族の風俗を描き、曇華林に拘りつつも、譚水壩という土家族の村の「跳喪」と呼ばれる葬式を通した死生観が描かれており、これまでと異なった「武漢」への描写となっている。

このように「出門尋死」よりもあとの作品群を見ると、「出門尋死」を書くにいたったプロセスがその後の武漢描写に繋がっていることが分かる。つまり方方にとって、「出門尋死」は彼女の新たな“漢味小説”の流れを作るある種のきっかけとなったのだ。

### 3. 方方の「家」

#### 3.1 「出門尋死」

ここで簡単に「出門尋死」について触れておくと、主人公何漢晴は専業主婦である。彼女は「便秘」という持病を抱えており、この便秘がもとで人生の重要な岐路で失敗を繰り返すことになった。しかし彼女は舅と姑、小姑、夫という家族のなかで、家をきりもりすることに十分な才能を発揮していた。一人息子も大学生であり、自分たちの生活は切り詰めるが、彼には何

不自由のない大学生生活を送れるようにと、まさに日々奮闘をしていた。

もちろん誰しも抱える生活における不満はあったが、「死にたい」と思うほどではなかった。しかしいつもの便秘で家のトイレを長時間占拠したことで、姑が寒いなか家の外にある公衆便所に行って倒れたことから、みなに責められる。頼りの夫劉建橋も相手をしてくれなかったことで癇癢を起こし、夫が製作していた模型の車を壊してしまう。そのことにかっとなった夫が何漢晴を殴りつけたのだった。その衝撃は何漢晴には大きく、「死にたい」という考えが頭をもたげるようになる。なにより家族は何漢晴が自殺するわけではないと、みながそのことを深刻に受け止めなかったがために、彼女は死に場所を求めて町に出る。愛する息子に電話をかけても心配もしてくれず、死に場所を求めていたはずが、根っからのおせっかいが災いして、結局は人助けをして歩くことになる。

どうせ死ぬのなら思い出のたくさんある漢水橋から飛び降りようと橋へ向かうが、夫の浮気が原因で何度も死のうとしていた妹分の文三花が晴川橋から飛び降りようとしている場面に出くわしてしまい、やはり彼女を助けるはめになる。

この作品は方々の作品としては珍しく「どたばたコメディ」の要素が強く、何より何漢晴という人物が面白い。「出門尋死」にいたるまでの武漢弁使用作品の「落日」,「奔跑的火光」はいずれも女性を主人公としており、特に後者に色濃く現れるように「女的命 [女性の運命]」と表現される女性の地位の低さや家族内で省みられない妻ないし母親の仕事を残酷なまでの筆致で描いている。

「落日」では、家族のためにつくし続けたが植物人間になったとき家族から生きながら火葬にふされそうになった祖母(李臘芝)がどうしてそのような運命をたどることになったのかを描かれる。祖母の人生は意識不明の彼女が自身のたどった道を夢見るように振り返ることで読者に示されてゆくが、肝心の家族にはその人生は何の意味も持たない。また家族からは「祖母(原文では“太”)」としてのみ扱われ、決してその「個」は認められないのである。

また「奔跑的火光」も同じで、本来ならば若さと美貌から青春を謳歌できたはずの主人公英芝が思わぬ妊娠をしたことから、貴清の家に嫁いだ。しかし嫁いだ先は古い因習にとらわれた村であり、夫貴清は働かないばかりか賭け事ばかりしている。その上貴清の両親は「嫁」はこうあるべきときまざまな仕事を押し付けてくる。実家の母もそれが女性の運命だから受け入れるように諭すばかりで、英芝にとっての救いにはならない。この作品は中国の農村の女性に対する価値観をよく反映しており、女性特に嫁にはその個性が求められない。奔放な英芝はそのことに苦しみ、夫からドメスティックバイオレンスを受けながらも、何とか夫と子供と三人で幸せな家庭を得ようとする。そこには離婚という選択肢も許されず、その結果英芝が夫を焼き殺すという最悪な結末を迎えるのだった。

「出門尋死」でも家の仕事全てが何漢晴の肩にかかっており、夫はリストラされて家におり、と主人公は前述した二作と同じ境遇にある。しかもその家事はいくら完璧にやったとしても家

族からは認められず、ミスだけが責められる。ところがこの二作とは決定的に違うのは、このことが悲劇とはならないのだ。それは単に何漢晴の性格によるものだが、「人生なんてこんなものだ」<sup>(16)</sup> と言い切れる強さ、そして何よりも夫が何漢晴を愛していることにある。つまり前者二作にはない味方である理解者が存在していることが大きな違いとなっている。

模型の車を壊したことで何漢晴を殴ってしまった夫劉建橋であったが、普段は何漢晴のストレスを発散させてくれるよき存在であり、味方であった。そして自殺する場所を求め彷徨った挙句、何漢晴がたどり着いたのは晴川閣であった。そこは若かりしころ夫とよく来ていたところで、初めてキスをした思い出の場所でもあった。そこに夫は彼女を迎えに来たのである。

この作品では何漢晴は世話好きで、近所の人から愛され、かわいがられている。また文三花たちにも頼られており、自分が死に場所を捜し求めている最中であっても、夜中の駅で絡まれている女の子がいれば助けに入り、死に一直線には向かって行かないのだ。確かに家族には彼女の働きもありがたみも分かってはもらえないかもしれないが、彼女を支えてくれるたくさんの理解者には恵まれていた。

彼女が夫とともに家に戻ったときも、「何漢晴が一步ドアをまたぐと、応接間のソファーに座っていた義母が、戻ったの？ 今日のお湯がまだ沸いていないわよと言った。義母の口調はいつもの調子だった」<sup>(17)</sup> と、何事もなかったかのように、義母が声をかけてくれるのだった。そして何漢晴もいつもと同じようにキッチンにお湯を沸かしに行くのだ。ここにはある種の矜持すら感じられる。そして言葉として一切語られることもないのだが、この場面から姑もまた何漢晴の理解者であったことが窺えるのである。

この何漢晴の生活そのものへの矜持と人物像が「出門尋死」の魅力であり、方方の作品のなかでもよく描かれる女性の運命の過酷さが、ここでは何漢晴という存在によって「受け止め方」によって変わるのだという答えが示される。その意味で、「出門尋死」はある種の開き直りとも思え、「女性の運命＝過酷」というこれまでの作品のくびきから放たれた作品となっている。

そのほかにも「出門尋死」には従来の作品と異なる点がある。方方は下放経験がないためか、これまで知識青年（知青）であった人物を描くことはなかった。しかし何漢晴は知青であり、またそれが原因でひどい便秘を患うことになった。また文三花が自殺をしようとしていた場面では、マスコミが登場する。文三花を説得したあと、橋の欄干を越えたままであった何漢晴に対するテレビでよく見かける女性レポーターの無神経さや感覚のずれを描写している。それはメディアというものがいかに自分たちの都合のよいように情報を作り上げ、そして取材対象者にいかに無配慮であるのかということ暴露しているのである。方方はこれまでもこういった社会のなかに存在する矛盾をシニカルに描き出しているが、この作品ではメディアにもその矛先が向けられているのである。

方方作品において、「出門尋死」はやはりある種の転換点を示していると考えられる。それは従来書かれてこなかった知青や武漢の文化というものが描写されているということも含め、

何より「女性」というものの運命を単に受容するだけではなく、それを昇華させたことにある。それを証明するかのように、「出門尋死」以降の武漢弁使用の作品は主人公が女性ではなくなり、そこに描かれているのは「女性」という「性」による運命ではなくなっているのだ。

### 3.2 方方と家族

方方の描く家族はどこか不完全であり、そして「死」がつねにまわりつく。「落日」の祖母は夫に早くに先立たれ女手一つで息子たちを育てあげる。夫の不在、母の不在は実際にいないということだけではなく、作品のなかでの存在感のなさという意味も含めてだが、彼女の描く家庭は家族の誰かに負担が大きいのしかかっているアンバランスな家族像が多い。これについては方方自身が「まさかみんながみんな自分の生活が完全であると思っているわけではないでしょう」<sup>(18)</sup>と、生活というのは不完全なものだということを指摘してはいる。

しかし方方の描くアンバランスな家族像には方方の家庭環境が影響しているのではないだろうか。「出門尋死」では女性の過酷な運命を昇華させているが、「出門尋死」以前はどうして女性の運命をかくも残酷に描くのかと思わせるものがある。そして作品の多くに横たわる「死」は、方方作品を読み解く一つのキーワードとも言える。「桃花燦爛」(『長江文藝』1991年第8期)では主人公栖が死を前に何を残せるのかという命題が提起されており、「風景」の語り手は死者である小八子である。「春天来到曇華林」では主人公華林が祖父と一緒に寝ているときに祖父が亡くなるという幼児体験を経ているがために「死」ということに敏感であり、最後も主人公の死で終わる。「落日」、「奔跑的火光」、「出門尋死」も形こそ違えど「死」が作品に関わっている。このように方方作品においては「死」ということは枚挙の暇がないほどである。

これは方方の父親の「死」と大きく関係している。言うまでもないが、「祖父在父親心中」(『上海文学』1990年第4期)は父親の死をきっかけにして書かれた作品で、その死を通して父親の生涯そしてその父(祖父)の死を描いている。父親の汪德佑が1972年9月2日に突然亡くなったことで、方方の人生は大きく変わったことは想像に難くない。当時彼女は高校2年生18歳であり、方方の一家は父親の収入のみで生計を立てていたのだから、父の死は収入の道が途絶えるということを意味していた。兄たちは下放し、家にいない時期があったが、方方は母と残されたのである。

「一個好家給人的懷想」(『方方影記』河北教育出版社、1998)のなかで、方方は両親がとても仲がよく、厳格な父に外交的で人助けを喜びと感じられる母という暖かい家庭であったことを語っている。一家は父の収入で食べており、母は家事の一切を取り仕切っていた。母親は働いた経験がなかったために、子供たちを育てるために慣れない仕事をしようと試みた。それは「落日」の祖母が夫に先立たれ、途方に暮れる間もなく、子供二人を抱えて何とか生活しようとしたその姿のようなのではないか。

そして1974年末、方方は貨物の積み卸し工に応募した。『方方影記』には、この仕事に従事

する人々の生活は「社会の低層」であり、人々から軽蔑されるということを分らないまま、ただ月38元の収入が3ヵ月後には42元になり、「自分が母親を完全に養うことができる」<sup>(19)</sup>という一心で母親の意見も聞かずに就職したことが述べられている。方方はこのとき社会の低下層に生きる人々を目にし、自身もその生活を体験した。作中にしばしば社会の底辺に生きる人々と大学を卒業した人や社会的に成功した人との間に横たわる「差別意識」を描きこんでいるように、このことは彼女の創作にも影響を及ぼしている。

父の死後、方方は母とほとんど離れたことはなかった。そのことは「母親越走越遠」（『方方影記』）のなかで、「母がわたしを19歳まで養ってくれたが、それからはわたしが母を養い、15年間養ったのだ。34年の時間のなかで、わたしは母とほとんど離れたことはなかった。小さいころはわたしが母の言うことを何でも聞き、わたしが大きくなってからは、母がわたしの言うことを何でも聞いた」<sup>(20)</sup>と述べていることから分かり、またこの部分では母親との関係を吐露している。

父の死は方方に自分の一家にまつわる歴史を知るきっかけを与え、母との生活と母の姿を目にして、「女性」という性のもつ運命について考えたのではないだろうか。方方は娘毛妹を出産した1989年に母親張恬然を亡くしている。そして方方は1999年に離婚すると、娘との二人暮らしとなる。それは「母—方方—娘」という「女」の系譜を描いているようでもある。

娘毛妹のことは目に入れても痛くないようで、「有個孩子真好呵」など『一個人怎樣生活無需要問為什麼』（時代文藝出版社、2007）所収の散文に娘のさまざまなエピソードを書き綴っているのだが、この娘には「女」の宿業を背負わせたくなかったのか、「落日」、「奔跑的火光」、「出門尋死」の三作は主人公の子供がいずれも息子となっているのだ。これは蘇童「婦女生活」（『花城』1990年第5期）で見られる女性の運命がループしてゆき、母から娘へとその「業」が呪いのように引き継がれてゆく構造とは異なっている。つまり方方作品における女の運命は主人公で完結し、決してその子供には引き継がれないのである。

ところで方方は「落日」のなかで、二つの親子関係を描き出している。一つは物語の主線となる祖母とその家族であることは明白だが、もう一つはこの一家の近所に住む女医王加英とその母親である。彼女は主人公一家とは異り、両親ともに医者というエリート一家で育った。しかし両親がバスと汽車の衝突事故に巻き込まれ、父は死亡し、母は下半身不随になってしまった。そのことがきっかけで紅安県から武漢に戻ることで、彼女の一生は変わってしまう。そのため結婚も遅くなった。母親の面倒に加え、精神的な助けにはなるが、物理的なことは何もしてくれない夫により、王加英の家事は増えるばかりである。

主人公一家の心の病はその「貧しさ」によるところが大きいのだが、一方で王加英を描くことで、実の家族であってもふとしたことでうとましく思ってしまう瞬間が誰にでもあるということを端的に描いている。この「落日」の王加英の構図は、実は「出門尋死」の何漢晴にも引き継がれているのだが、方方自身の「影」の部分でもあるのではないだろうか。父の死をき

かけに、結果として方方は母親の生活を背負わねばならないという思いがあった。仲のよい親子であったとしても、魔が差す瞬間はある。方方もそんな思いに囚われた瞬間があったのではなかろうか。そしてそんな思いを持ってしまった自分について考え、そのことが創作に生かされ、「落日」で描写したように人間誰しもが肉親への殺意を抱く可能性があることを示唆したのである。

さらに「出門尋死」の主人公である何漢晴の姿は方方の母親像を思い起こさせる。一つは主婦であるということ、また近所の人たちに愛され、何かというと助けを求められるという人間だという点である。家族の誰もが火にかけられたやかんを気にかけず、ただ一人心中文句を言いつつも、トイレから出て来て火を消す何漢晴は、方方の子供時代家のなかを一人できりもりしていた母の姿と重なるのだ。

方方の母と何漢晴の違いは、“文化〔教養〕”という言葉で表現される高等教育を受けたことのあるなしである。何漢晴は方方の小説のなかでは珍しい知青であり、彼女を苦しめる便秘により進学の道を逸してしまった。嫁ぎ先では元中学の国語教師だった姑を筆頭に、教養を感じさせる話し方をするので何を言っているのか分からないこともあった。何漢晴にとってはこの“文化”というキーワードがコンプレックスを刺激するものであり、便秘が引き起こした最大の悲劇でもあった。便秘でトイレにさえ籠っていなければ、彼女は進学の道を得ることができ、人にその道を横取りされることもなかったはずだったからだ。

また夫の劉建橋の両親にもこの“文化”の差が夫婦の力関係に影響を及ぼしている。舅は大学で働いてはいたが郵便物を扱っていただけで大学という職場においては地位が低く、中学の国語教師であった姑を常に立てていた。このようなパワーバランスを描くなかで、方方は何漢晴に「文化〔学〕のないものには文化のないものの強みがある（中略）。この世には、どうしても文化のないものがやらねばならないことが非常に多く、そうしてこそうまく行くのだ」<sup>(21)</sup>と言わせることで、学歴による差別意識に対して皮肉をきかせている。

ところで何漢晴と夫劉建橋を見ていると、二人の関係は決して悪いものではなく、むしろ仲のよい夫婦と分かる。特に自殺しようと飛び出した何漢晴を迎えにやって来た、二人の思い出の場所である晴川閣の下でのやり取りは仲のよい夫婦を感じさせるものである。方方が『方方影記』のなかで、両親の仲がよかったと述べていることはすでに述べたが、何漢晴夫妻の姿は方方の両親の姿にも重なるのではないだろうか。5か国語を操れたという方方の父親は典型的なインテリで、「読書は彼にとって生命のなかの空気と水と同じであった」<sup>(22)</sup>というほどの読書人であった。それは黙々と車の模型作りに打ち込む劉建橋と家事を取り仕切る何漢晴が、読書にいそむ父親と家事をする母親との構図にも見えるのだ。

すでに触れたが、方方作品のなかでは大学生であるかどうか、“有文化〔学がある〕”かどうかということが「身分」の差につながるがよく描かれている。それはやはり彼女が「社会の低層」とされる積み下し工と武汉大学進学と2つの経験をしたことによる。方方の母親は自

分の子供がみな大学生になったことを誇りに思っていた<sup>(23)</sup>。そして子供たち全員を大学生にした母親は周囲からすごい人物と見なされていたのだ。そうして方方たちが大学生活で不自由しないように、病気になっても決して病院に行かなかったと「母親越走越遠」で紹介されている。これが母親であるのだと、方方は自分の母を通して感じ、そしてその姿を作中の女性たちにあてはめているのだ。さらに方方自身が2つの階層の生活を味わっただけに、大学に進学するということが中国社会において社会的ステータスを持つということを明確に示しているだけでなく、大学進学が生んだ悲劇にも彼女は多く筆を走らせているのである。

方方の家族への拘りは、両親だけに止まらない。それは『方方影記』にも色濃く現れている。これは方方の家が名門と言えなくとも、「歴史」に名を記した人物がおり、方方がそのことを誇りに思っているからでもある。母方には「江西七老」と呼称された楊廣笙<sup>(24)</sup>がおり、父方には方方が「南京爺爺」と呼んでいた汪辟疆<sup>(25)</sup>がいる。特に汪辟疆のことは自分の祖父と思い込んでいたほどで、「南京爺爺」(『鍾山』1999年第1期)などの散文で多く語っている。

その汪辟疆が自分の祖父ではなく、また自分の祖父汪国鎮が『江西省通志』に掲載されるほどの人物であり、さらに壮絶な最後を遂げたと知ったのは、父親の「死」による。父親の死は、方方にさまざまなものをもたらした。創作においては、家族史を繙くことになり、自らのルーツを深く知ることになった。父親の生涯と祖父の死を小説にただけでは飽き足らず、方方は『方方影記』で明かしているように、母を含む三姉妹の物語も描こうと考えているようだ。しかし家族のことを調べると一人一人が一冊の本になるほどの人生を送っており、まだ形になっていないという。方方にとって家族史はまだ形をなしていない部分もあるが、彼女の創作にとって大きな刺激となったことは疑いがない。それは「武昌城」(『鍾山』2006年第6期)や現在準備中という歴史作品<sup>(26)</sup>にもつながっていると言える。

方方にとって、とにかく父親の存在は大きく、父親の早い死が彼女を強いファザーコンプレックスにしている。父親がカメラで撮影することが好きで、それをコメント付きでアルバムにまとめていたことは、『方方影記』などで紹介されており、そのアルバムに残った写真は方方の散文にも使われている。残念なことに、文化大革命中に多くの写真が焼却されたという。その写真は方方の家族にとってだけではなく、貴重な記録になったことは疑いない。「春天来到曇華林」の主人公華林が母の弟であるおじに“海鷗”カメラを買ってもらい、中学の国語の教師をしながらカメラマンを目指しているという姿は、1930年代に大学の卒業旅行のために購入したカメラでさまざまな人物や風景を撮影してきたという方方の父親を彷彿とさせる。このように方方作品には節々に両親特に父親を感じさせる部分があるのだ。

方方は「南京爺爺」汪辟疆の影響か、古典文学への造詣も深い。しかしこれは時代によって埋もれてしまったが、父親がどんな時にも勉強をし続け、読書をし続けたというこの姿勢が、方方に影響を与えたのではないだろうか。だからこそ方方の創作はつねに形を変え、これまでも新写实小説や公安小説などさまざまジャンルに互った創作をしているのだ。



ここで少し方方の結婚について触れておく。方方が離婚していることはすでに述べたが、方方は元夫である梁枢果のことについては、あまり語ることがない。『方方影記』が書かれたころはまだ離婚をしていなかったのも、「安寧是最好的感覺」(『方方影記』)にしろうじてその出会いと家族となった過程が語られている。しかし『方方影記』の写真には「夫梁枢果。彼は生粋のインテリである」<sup>(27)</sup>とだけ書かれ、その人柄をしのばせるにとどめている。

そのため「出門尋死」や「落日」の王加英の夫のように、方方の夫が家では家事の一切を行わなかったかは分からない。ただ王加英の夫は方方の元夫と同じく大学で教鞭をとっていた。中国のインターネット上には方方が出産したときに夫がほとんどなにもしてくれなかったことが原因で離婚を決意した<sup>(28)</sup>という噂がまことしやかにささやかれているが、真偽のほどは定かではない。しかし方方の作品では夫婦の双方が家のことを協力して采配するという描写は少ない。夫婦のうちどちらか一人があくせくしていることが多く、作品によっては夫婦のどちらか一方が存在すらしていないこともある。もちろんこれは方方の両親の姿でもあるので、彼女の夫婦生活が影響しているかどうかは明言できない。

このように方方の創作にとって、両親特に父親の存在は大きく、その「死」によりもたらされたものが大きい。これまで「落日」に見られるように、夫の早すぎる死がもたらした女性の過酷な運命が描かれてきたのは、「女」という性に課された「宿業」を母の背中を通して見てきたからであろう。その母を89年に亡くし、99年に方方自身は離婚によって、母のように娘と二人で生きることになる。方方は母親とは違い、離婚をしたからとて、収入の道が閉ざされ、路頭に迷うということはなかった。作家としても成功を収めており、離婚当時は雑誌の編集長もしていたのだ。しかし母として子供の責任を全て担う立場になると、さまざまなものが見えてきたはずだ。

「奔跑的火光」(2001)の時点では、まだ「女性」であるがゆえに過酷な運命を迎えざるを得なかった主人公を描いていた。しかし「出門尋死」(2004)にいたって、両親を彷彿とさせる仲のよい夫婦像とおせっかいで人から信頼され、なにより「人生なんてそんなものだ」と言い切れる強さを持つ何漢晴に、その像は移る。この変化は方方自身が人生を受容し、女性の運命を昇華し得たからなのではないだろうか。その悟りを何漢晴に託し、また何漢晴夫妻に方方の両親の姿を投影することで、方方の創作も新たな段階を迎えることができたのだ。

#### 4. おわりに

見てきたように、「出門尋死」は方方作品にとって、重要な転換点と言える作品である。それは武漢弁の全編に互る使用を再開したことを始めとする、所謂“漢味小説”を再開する作品という位置づけだけでなく、彼女の描く「女性」に対する運命をも変えた作品であった。

方方が「わたしは自分の作品で努力して自己表現をしている」<sup>(29)</sup>と述べるように、作品は

方方の「自己表現」と言える。つまり「出門尋死」に描かれた、「女」という性が背負った運命に対する開き直りは、方方の人生観の変化とも言うことができる。その変化のきっかけとなった原因はまだ考察の余地があるが、方方の人生と何らかの関係があることは間違いない。父の死後、方方の支えでもあり、支え続けてきた母の死後から約15年という年月を経て、自らも離婚という経験をし、娘と二人の時間を過ごしてきた。その娘も十分にものが分かる年齢になり、自らも50歳になろうという、それらの変化が方方のなかでジェンダーを超越するきっかけを与えたのだろう。

また再び武漢という題材に向き合うことになったのは、「落日」が再びスポットを浴びることになり、さらに自分自身も『漢口租界』などの武漢の歴史に触れる著作やドキュメンタリー放送のなかで「語る」機会を得たという背景が大きく影響している。そして武漢について触れるにつれ、彼女のなかに常に存在しているコンプレックス—武漢人として認めてほしいという気持ちが大きくなったのだ。

つまり武漢に2歳から暮らしている方方にとって、作品を通した「それ以降、わたしはずっと武漢で暮らし、概ね生粋の武漢人となったのだ」<sup>(30)</sup>という叫びにも似た主張となっているのだ。それゆえに、武漢を書き続け、一番コンプレックスを刺激する武漢弁を作中に使用し続けることで、自らのアイデンティティの帰属先を自他ともに認めてもらおうというのである。

「出門尋死」は彼女の両親へのオマージュとも言え、何漢晴夫妻の姿は方方の両親を彷彿とさせる。何漢晴を通して描かれた日常を「生きる」ことこそが、ある種の美学であり、それこそが生活の矜持であることが示されている。そして彼女の作品のなかで過酷な運命を背負わされ、その立場を理解する者がいたとしても、決して救いの手が差し伸べられなかった女性たちに、「出門尋死」では多くの理解者と味方がいるだけではなく、「人生なんてこんなものだ」と開き直れる強さを示した。それこそが方方の「女性の運命」への答えなのだ。

しかし一方で、「出門尋死」でも払拭できなかったのが、方方作品に横たわる「死」である。彼女にとっての死は、父親の死から出発している。「出門尋死」では、登場人物たちはいずれも死を回避したものの、「出門尋死」以降の作品では再び「死」が頭をもたげる。方方にとって、父親の存在特にその死の影響は色濃く影を落としており、「出門尋死」で人間の「死」に対しても一度は答えを導きだしたものの、「春天来到曇華林」ではまた「死」がテーマとなっている。しかし彼女の描く死は「春天来到曇華林」で描かれたように、「生き続けられなければ、死ぬはずだ」<sup>(31)</sup>と、生と死の関係は極めてシンプルである。そこには「死」に抗おうとする姿はなく、ただそこにあるだけなのだ。

方方の作品にとって、「出門尋死」は明らかに転換点となる作品である。もちろん前後の作品には同じテーマが存在する。それは家族という人間関係であり、そのなかに存在する女性の運命であり、「死」である。しかし何漢晴の存在がその全てを昇華させ、ある種の開き直りともとれる「人生なんてこんなものだ」という受容を見せる。もちろん「出門尋死」でもシニカ

ルな描写は取られているのだが、そのシニカルな場面においても、何漢晴の存在がそれらをどこかコミカルに変えてしまう。この何漢晴を中心とする家族像は、方方作品では新しい家族像ではあるのだが、しかしこの家族像は方方の父親がいたころの家族像でもあり、そして何より何漢晴は母親の姿でもあった。大きな「家」としての武漢を再び描き始めた「出門尋死」において、方方は自らの描き続けた不完全な家族像から脱し、方方自身が理想とした家族像を描き、それを新たな“漢味小説”のスタートとした。そして方方の「女の運命」をも昇華させたのである。

【注】

- (1) 原文は「那種客居的感覺，那種與周邊人的生活不相同的感覺，那種語言表達上的差異，永遠都存在」（「後記」『閉上眼睛就是天黑』武漢出版社、2006、p.351）。
- (2) 原文は「我們這些武漢話說得不算太好的人」（『武漢人』p.153）。この言葉は王振武について言及したもので、彼の家が漢正街にあり、「他能說一口非常地道的武漢話」とした上で、「但他卻說得不多，跟我們這些武漢話說得不算太好的人交談時，他或用普通話，或用那種被改造過的武漢話」（p.153）としている。
- (3) 原文は「從外地人住成了本地人」（「後記」『閉上眼睛就是天黑』p.352）。
- (4) 原文は「且從小生活在以外地人為主的宿舍區內，直到今天為止，我的武漢話仍然說得不是十分標準」（「自序」『武漢人』p.1）。
- (5) 原文は「原因是一則我並非這裡土生土長，父母搬到這裡來時，舉目無親；二則我沒有居住武漢市井裡份之中。我的武漢話講得不很地道，我對武漢的道路不很熟悉，我對武漢的風俗不很習慣，我對武漢的飲食只一知半解」（「後記」『閉上眼睛就是天黑』p.351）。
- (6) 原文は「（但是我）還是願意寫它」（「後記」『閉上眼睛就是天黑』p.351）。（ ）内は使用をしていない箇所。引用文の（ ）内は引用者による。
- (7) 「方方：我和小說一起在武漢成長」『武漢晚報』（2008.8.31）参照
- (8) 『日出日落』というタイトルでドラマ化された。後に『親情協議』と改題されている。
- (9) ドラマ化にあわせて、2003年1月に群集出版社から『落日』が単行本として出版された。
- (10) 「獻給我生活的城市」『春天』（p.275）参照
- (11) 呂運斌「唐寡婦店前」（『芳草』1985年第7期）から始まるシリーズで、漢正街を舞台にそこで暮らす人々を描いた。このシリーズを銘打って「漢正街風情錄」としている。
- (12) 原文は「（熱乾麵小吃鋪的女主人麼樣說的？）一個人生下去，就是為了受這一場累？（何漢晴想，）可能人就是得把他這一生該受的累受完，才能去死」。（『人民文学』2004年第12期、p.44）（ ）内は使用していない箇所。前者については引用部はあえて何漢晴の「こうだっただろうか」という疑問の形式を取っていない。
- (13) 原文は「人生就是這樣呀！」（同注12、p.44）
- (14) 女主人が野次馬として立ち去ろうとしている客に「莫走啦！熱鬧看了，再吃碗熱乾麵，今天的日子不就過得有滋有味了？」（同注12、p.34）と叫んでいる。
- (15) 原文は「你若說你不是一個地道的武漢人，武漢都不同意」（「後記」『閉上眼睛就是天黑』p.352）。
- (16) 注13、参照
- (17) 原文は「何漢晴一腳踏進門，坐在客廳沙發上的婆婆說，回了？今天的水還沒有燒咧。婆婆的語氣還是老樣子」（『人民文学』p.44）。
- (18) 原文は「難道大家都覺得自己的生活沒有殘缺嗎？」（『我的讀書與寫作』『長江文藝』2006年第8期、p.8）。
- (19) 原文は「便可以完全靠自己養母親」（「回頭看看來時路」『方方影記』p.85）。

- (20) 原文は「母親將我養到十九歲，然後便是我來養她，我養了她十五年。三十四年的時間裡，我同母親幾乎從未分開過。小時候我什麼都聽她的，我長大後，她便什麼都聽我的」(『方方影記』p.31)。
- (21) 原文は「没文化有没文化的強，(中略)这世上有蛮多事情，非得要没有文化的人去做，你才做得通」(『人民文学』p.9)。
- (22) 原文は「讀書於他就如同生命中的空氣和水」(「一個好家給人的懷想」『方方影記』p.68)。
- (23) 「母親越走越遠」(『方方影記』)に「七十年代末，我們居住的劉家廟宿舍，誰都知道母親是個了不起的人，她所教育的兒女全都是大學生。母親以我們為自豪」(pp.31, 32)と述べられている。
- (24) 江西湖口の人。『方方影記』によると、1869年生まれで、方方の生まれた年である1955年に逝去した。「二次討袁」(『方方影記』では「二次革命」と表記)のときに家財を処分して資金を提供し、「江西討袁軍総司令檄文」を書いた人物でもあるという。この二次革命が失敗したのは、李烈鈞と海外へ逃亡した。1914年7月に孫文が中華革命党を成立した当初から中華革命党に参加していた。その後も袁世凱討伐のために資金を援助するなどし、袁世凱死去の後江西に戻るも、蒋介石とはそりが合わなかったことから政府の重職につくことはなかった。1949年には江西和平促進委員会を組織し、「江西七老」と称されたうちの一人である。
- (25) (1887-1966) 江西彭澤の人で、方方の祖父の兄。南京大学などで教鞭を執っていた。著書に『唐人小説』など多数。
- (26) 「方方：我和小説一起在武漢成長」(注7参照)に「わたしは武漢の過去と現在に特に関心を持っており、読者に武漢の都市の記憶を忘れないでほしいと言いたいのだ[我特別關注武漢的過去和現在，想告訴讀者不要忘記武漢的城市記憶]とし、1920年から47年までの武漢の、とある漢劇の役者の人生を書いた長編小説を、2008年11月に出版予定であることを紹介している。
- (27) 原文は「丈夫梁樞果。他是一個純粹的知識分子」(『方方影記』p.155)。
- (28) <http://cache.tianya.cn/publicforum/content/funinfo/1/1092899.shtml> 参照
- (29) 原文は「我就努力地用自己的作品表達自己」(「後記」『閉上眼睛就是天黑』p.352)。
- (30) 原文は「這之後，我便一直生活在武漢，基本上成了一個地道的武漢人」(「回頭看看來時路」『方方影記』p.81)。
- (31) 原文は「活不下去才會死」(「春天來到曇華林」『小説月報 原創版』2006年第2期)。

#### 【参考文献】

- 「方方」『小説評論』2002年第1期
- 陳昌儀『贛方言概要』江西教育出版社、1991
- 李俊国『在絕望中的涅槃 方方論』湖北人民出版社、2000
- 李榮主編『武漢方言詞典』江蘇教育出版社、1995
- 李榮主編『南京方言詞典』江蘇教育出版社、1995
- 瀬邊啓子「中国現代小説における武漢弁使用の一考察」『大阪大学言語文化学』vol.6、1997
- 呉波「方方小説の死亡形態描述與崇高信念表達」『小説評論』2007年第4期
- 朱建頌『武漢方言研究』武漢出版社、1992

(せべ けいこ 中国学科)

2008年10月14日受理